

こどもの感性と創造性を育む 五感をとおした美的経験によるアートプログラム開発

代 表 者：鈴木 光男(社会福祉学部)
協力者・連携機関：坂田 芳乃(アルテ・プラーサ代表)
住 麻紀(アルテ・プラーサ アーティスト)
松井 晃子(アルテ・プラーサ アーティスト)
木村 由美子(三島市文化振興課 主幹)
渡部 碧唯(清水町社会教育推進係 主事)
藤田 雅也(静岡県立大学 准教授)
島口 直弥(浜松市美術館 指導主事)
寛 有子(浜松学院大学 准教授)

【経緯】

こどもは視覚、聴覚、触覚、味覚、臭覚といった五感を駆使して、自らの世界を認識し、さらに出会う世界を広げていく。DX化が進展する社会では、触れなくても触れたように感じる間接的な体験が増え、直接触ったり、聞いたりすることによる感覚を意識し、さらに磨く機会が減少している。目・耳・手に触れ感じたことを豊かに表現することで、こどもの感性と創造性はさらに磨かれていく。アートを軸に革新的な教育を展開するレッジョ・エミリアの幼児学校では、五感をもとに音・光・色・素材・香りに視点を当てた美的経験を組み込んでいる。このようなことから、県内各地で活用可能な「こどもの感性と創造性を育む美的経験によるアプローチ」に取り組み、こどもたちが遊ぶ感覚で美や美に類する価値を経験し、こどもならではの表現を展開する機会を創出したいと考え本事業に取り組んだものである。

【事業概要】

2021年アルテ・プラーサ(以下、アルテ)主催「見えないものをみる 水の音をかたちにしちゃおう」ワークショップ動画をベースに「感覚を活かしたこどもの表現活動としてのアートプログラム」を協力者とともに開発する研究会を設置し、事例を基にアートプログラムの開発とモデル事業を実施した。ここで得られた知見をもとに、2022年度はさらに県内各地域に根差した様々な美的経験を軸としたこども向けアートプログラムを開発し、アーティストや保育・教育関係者と共に実践しようとしたものである。

【期待される効果・成果】

触って、嗅いで、聞いて、見てなど様々な感覚体験からイメージしたことを言語化したり、表現したりすることで、身体をとおした美的経験として蓄積され、いつしか学びとなって、こどもたちならではの感性や創造性、思考力・判断力・表現力を育てアートの視点を活かした幼児教育・初等教育の実践が可能になる。県内東部・中部・西部各地での「美的経験によるアートプログラム」のモデルとなり、障がいのあるなしに関係なく全ての教育・保育現場での活用に大いに寄与するものとする。

【実施方法】(表1)

アルテのワークショップを軸に、それぞれのアーティストや専門家による企画を実施し、代表者・協力者全員による事前・事後の研究会を開催し、企画検討や参与観察記録・振り返りを共有しアートプログラムを開発する。また、近隣の学校教育現場にてアーティストとこどもを出会うようにし、協働して学習活動や事業を展開するなどもした。

表 1 本事業に関わる主な活動一覧

※表中「アルテ」はアルテ・プラーサ関連の事業、「学校連携」はそれ以外の近隣の学校と連携した事業を意味する。

| No | 開催日 | 内 容 | 備 考 |
|----|----------------|---|-------|
| 1 | 5月16日 6月27日 | アルテ①：「みえないものをみる 水の音をかたちにしちゃおう」（2021年開催）ワークショップ動画からアートプログラム化を図るための課題等を抽出 | Zoom |
| 2 | 5月24日 | 学校連携①：みをつくし特別支援学校シャッターアート打合せ（造形作家 鈴木海斗 氏・有限会社 宣美代表取締役 内山将 氏） | 現地・対面 |
| 3 | 8月25日 | アルテ②：10月ワークショップ事前現地打合せ | 現地・対面 |
| 4 | 10月16日 | アルテ③：触覚をとおした美的経験によるアートワークショップ「アート寺子屋『みて、きいて、さわって、つくっちゃおう』」開催 | 現地・対面 |
| 5 | 11月2日 | アルテ④：10月ワークショップ事後研究会（振り返り） | Zoom |
| 6 | 11月9日 | 学校連携②：磐田第一中学校合唱コンクール 歌唱披露（メゾソプラノ歌手 本多厚美 氏） | 現地・対面 |
| 7 | 12～1月 | アルテ⑤ 聖隷社会福祉学会誌 論文執筆 | メール審議 |

【実施報告】

1. アルテ関連

1-1 アート寺子屋「みて、きいて、さわって、つくっちゃおう」実施概要

アルテに関しては、2022年10月16日の「アート寺子屋『みて、きいて、さわって、つくっちゃおう』」がメイン事業であった（写真1. チラシ参照）。この事業前後でオンラインや現地での打ち合わせを重ね、当日を迎えた。以下、当日の実施概要である。「第一部」はジュリアーノ・ヴァンジ作品の鑑賞、「第二部」は石を素材としたワークショップとなっている。

①タイトル：アート寺子屋「みて、きいて、さわって、つくっちゃおう」

②開催日時：2022年10月16日（日）10:00～16:00

③会場：ヴァンジ彫刻庭園美術館 屋外庭園

【第一部】講師：渡川智子（ヴァンジ彫刻庭園美術館学芸員）
ヴァンジ彫刻庭園美術館屋外彫刻作品4点の触察と鑑賞
ワークショップ（視覚と触覚を活用する《触察と鑑賞》による身体のだるまな部位を使った作品鑑賞）

【第二部】講師：藤田雅也（石の彫刻家・静岡県立大学短大学部こども学科准教授）

《出会い》《対話》《共有》をテーマにした石を素材としたワークショップ（一連の活動を通じて、参加者自身が素材である板材、玉石等に出会い、様々な探索・探求により自らの表現を考えるワークショップ）

1-2 【第一部】ヴァンジ作品鑑賞概要

ワークショップの導入として、ジュリアーノ・ヴァンジ Giuliano Vangi (1931～) の彫刻作品を鑑賞した。鑑賞した作品は以下の4点である。



写真1 チラシ

- ・《層になった木を眺める人物》1993年（図1）
- ・《くつろぐ男》1993年（図2）
- ・《顔に手をやる女》1994年（図3）
- ・《後ろ手に立つ人物》1994年（図4）



図1 左上《層になった木を眺める人物》
 図2 左横《くつろぐ男》
 図3 中上《顔に手をやる女》
 図4 右上《後ろ手に立つ人物》

1-3 【第二部】石を素材としたワークショップ概要

第二部のワークショップでは、《出会い》《対話》《共有》の3つの出来事の往還によって、自分なりの見方や感じ方、考え方を働かせながら、表現したり鑑賞したりする活動を展開した。図5は、ワークショップにおける3つの出来事の模式図である。以下、具体的に各出来事の詳細である。

1-3-1 《出会い》11時～12時

- ① 講師自己紹介と活動の流れの説明
- ② 講師が制作した石の彫刻作品を探す
- ③ 講師が制作した石の彫刻作品を触りながら鑑賞する
- ④ 「素材」（材料・道具・技法）の紹介
 - ・材料：御影石・大理石などの板材、小石（玉砂利）等
 - ・道具：鑿、ハンマー、ゴーグル、砥石、耐水ペーパー、石材用接着剤等
 - ・描画材：クレヨン、絵の具、油性マーカー等
- ⑤ 行為や表現技法の紹介と実演
 - ・積む、並べる、割る、削る、磨く、描く、塗る、接着する等

1-3-2 《対話》13時～15時 ※こどものみ参加

- ① やってみたい行為や表現技法に取り組む
- ② お気に入りの石を探す

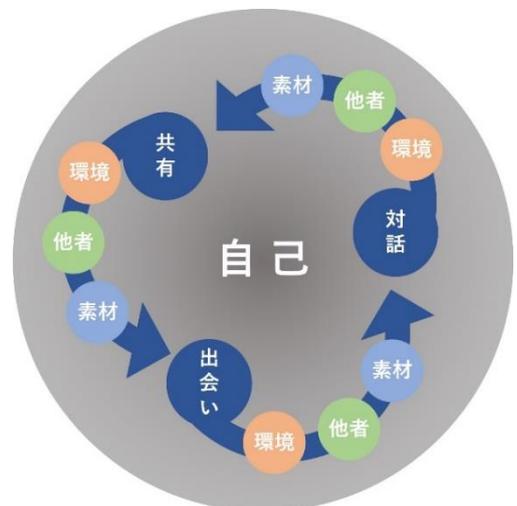


図5 3つの出来事の模式図
 【藤田作成】

- ③どんな表現をしてみたいか考える
- ④他者や素材、環境との対話を通して、自分なりの行為や表現に挑戦する

1-3-3 《共有》15時～16時

- ①自分の作品などについて「紹介カード」記入
- ②自分の作品などと「紹介カード」を好きな場所に展示
- ③自分の作品などについてのお話をする（希望者のみ）、話を聞く（全員）
- ④自他の作品などを自由に鑑賞
- ⑤他者（こども・講師・保護者等）と交流
- ⑥活動の振り返り

1-3-4 活動中のこどもの姿

(1) 《出会い》によるこどもの姿

用意された「素材」（材料・道具・技法）と出会い、「積む」、「並べる」、「割る」、「削る」、「磨く」、「描く」、「塗る」、「接着する」等さまざまな行為に興味を持ち、活動を展開し、イメージを広げていこうとする様子が見られた。

(2) 《対話》によるこどもの姿

こどもたちは、「環境」や「素材」との《出会い》を通してさまざまな行為に興味を抱き、「他者」との関りによって自分なりの表現を展開していこうとする姿が見られた。

図 6 は、あるスタッフが黒い小石を渦巻き状に並べる行為に触発されて、その周辺に白い小石を並べたこどもの表現である。図 7 は約 2 時間かけて 1 つの石を磨き続けるこどもたち、図 8 は大きな石の板を小さくなるまで割り続けるこどもの様子である。

(3) 《共有》によるこどもの姿

図 9～14 は、こどもたちが展示した作品などである。

2. 学校連携

2-1 静岡県立浜松みをつくし特別支援学校シャッターアート概要

静岡県立浜松みをつくし特別支援学校は、本学から 10 分ほどのところにある 2021 年度に開校したばかりの小学部から高等部までの特別支援学校である。体育館と倉庫それぞれのシャッターを使ったアート活動を展開したいという相談を受け、磐田市の造形作家 鈴木海斗氏と、有限会社 宣美代表取締役 内山将氏に依頼し、このシャッターアートの活動を展開し始めた。2022 年度はこどもたちや先生たちの願いを集約し、アイデアスケッチをもとに鈴木海斗氏がデザイン案を作成するところまで進めることができた。2023 年度には具体的に作業を進め、完成を目指す方向で計画を練っている段階である。図 15 は、こどもたちのアイデアをもとに鈴木海斗氏が作成したデザイン案である。

2-2 磐田市立磐田第一中学校合唱コンクール 歌唱披露概要

2022 年 11 月 9 日、磐田市民文化会館「かたりあ」にメゾソプラノ歌手 本多厚美氏を招き、生徒たちに歌声を披露していただいた。本多氏は浜松市やらまいか大使・静岡県ふじのくに観光大使を務める世界で活躍してきた方であり、歌唱指導に関する本多メソッドを開発もしている。

この磐田第一中学校だけでなく、磐田中部小学校や浜松市立萩丘小学校でも歌唱指導を実施していただいた。

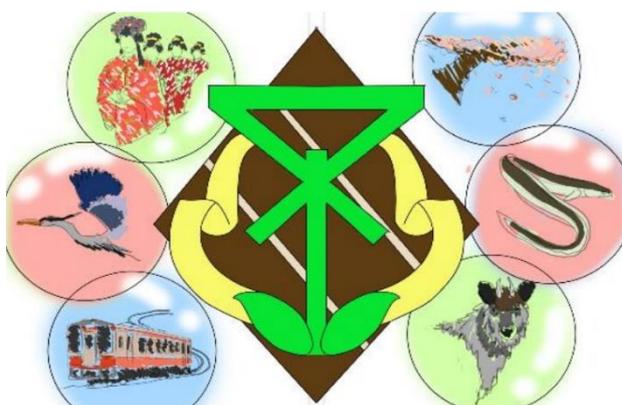


図 15 シャッターアートデザイン案



図 9 石を積む行為から生まれた風景



図 10 石を割る行為から生まれた表現



図 11 石を塗る行為から生まれた宝石



図 12 石を並べる行為生まれた文字



図 13 石に描く行為から生まれた表現



図 14 石を磨く行為から生まれた器

【事業の成果と課題】

保護者からは、参加した子どもたちの満足感のもとになった「何もつくらなくてもいい」という「寄り添う大人」の構えを評価された。普段の学校生活などで「いいことを発表する」あるいは「上手につくる」という意識が知らず知らずのうちに醸成され、こどもの感性や創造性に蓋をしてしまっているところがある。今回のような対話型の鑑賞や石という素材に身体を通して関わり、その行為そのものの意味を省察

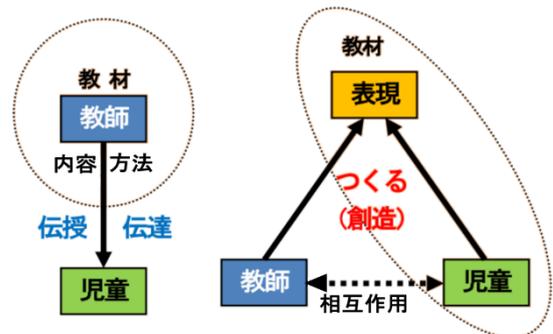


図 16 伝授型と創造型の学習モデル (佐伯「双原因性感覚」をもとに鈴木作成)

していくことが、アートプログラムを開発していく上では重要な視点であろう。これは学校連携事業においても同様である。このような視点が明らかになった点が何よりの成果と言える。

図 16 は伝授・伝達型の学習モデルと、佐伯の「双原因性感覚」に立った創造的な学習モデルを筆者なりに作図したものである。造形ワークショップの内容よりも、アートプログラムの進め方よりも、先ずは大人とこどもが相互作用し合う関係性になることを大切にして今後のアートプログラムやワークショップの展開をしていく所存である。